

気候変動から気候正義へ、 防災への認識を変えるとき



気候変動で何が変わる？

この20年ほど気候の変化に合わせて酷暑、ゲリラ豪雨、線状降水帯など天気に関して新しい言葉が出てきました。その原因の一つに海水温の上昇があります。この影響で、メンバーの一人の故郷では魚の身がしまらず、不味くなったと言われるようになりました。

魚が不味くなったことで地元の小料理屋もメニューを変え、スーパーの魚売り場は品ぞろえを変え、街には今までなかった回転寿司屋のチェーン店ができたといえます。こうした気候変動が自分たちの生活に与える影響は実は大きいことを教えてくれます。

別のメンバーのワイン講師の方はワインの生産も変わってきたことを教えてくれました。世界の主要なワイン産地は、一般に北緯・南緯30度から50度付近の「ワインベルト」に集中してきました。

しかし、温暖化によって、従来は寒過ぎたイギリスや北欧、カナダなどでワイン造りの可能性が広がる一方、南ヨーロッパ、カリフォルニア、オーストラリアなどでは、猛暑や水不足によって従来の栽培を続けることが難しくなり始めています。

ワイン産地は、より冷涼な緯度や標高の高い場所へ広がっています。2024年に発表された研究では、世界の平均気温が産業革命前より2℃を超えて上昇した場合、現在の主要なワイン産地の最大約70%で、栽培に適した条件が大きく損なわれる可能性が指摘されています。

そうしたことからワイン業界では気候変動に対して温室効果ガスの削減に取り組んでいるといいます。伝統として900グラムの瓶を使っていたのを、835グラムに軽量化し、二酸化炭素の排出削減を行っているといいます。また、空輸よりも船での輸送を推奨し、独自の認証制度も作ったそうです。

気候変動に対して一部の人ががんばるのではなく、業界をあげて対応しており、ワインを通して気候の変化を知り、土地、農業、文化を守りながら、これからも世界各地のワインを愉しみ続けられる未来につなげていくことができると語ってくれました。

知っているけど、知らんぷり。な～ぜ？ な～ぜなの？変化を突きつけられる私たち

海外ではワイン業界のように業界をあげて気候変動への対応を進めているところもありますが、日本ではどうしても企業などの一部の組織単位のレベルになってしまうように見受けられます。

私たちが使うエネルギーも似たようなものだと思いますか？水力、風力、太陽光などの再生可能エネルギーは、自然条件によって発電量が変動するという課題を抱えています。安定した電力供給や脱炭素をめぐる議論のなかで、今後、原子力発電回帰の動きがさらに強まる可能性もあります。

しかし、原子力発電は発電時のCO₂排出量が少ない一方で、半減期が数万年に及ぶ高レベル放射性廃棄物を地震、火山活動、洪水などの自然災害から長期間安全に管理し続けなければならないという問題があります。予測も制御もできない災害によって放射性物質が地上へ流出し「核の洪水」となって未来の人々を襲う可能性まで考慮したうえで、私たちは今、どのようなエネルギーを選択するのか、迫られています。

災害の被害は平等ではない

2026年8月26日にネパールで発生した大規模な土石流・洪水の惨状は記憶に新しいかと思います。ヒマラヤ山脈では、岩盤を覆う永久凍土や氷河が温暖化によって融解し、これまでとは異なる地盤の不安定化や大量の融水をもたらす危険性が現実になりました。本来、貴重な水源であるはずの雪や氷。急速な気温上昇により融けた水が夥しい量となり、津波を思わせるほどの破壊的な土石流や洪水となって人々の暮らしを襲ったのです。

ヒマラヤを源流とする河川は国境を越え、アジア各地の人々の生活や農業、発電を支えています。被災した水源や河川流域の復旧、ダムなどのインフラ再建には、被災国だけでなく、温暖化という地球規模の問題に関わる国際社会全体が、早急に資金や技術を提供していくべきでしょう。

こうしたことを表す言葉として最近よく聞かれるようになった「気候正義」という言葉があります。「気候変動」と関係の深い言葉ですが、同じことを意味しているわけではありません。ここを分けて考えてみると、今起きている災害と私たちの暮らしとの関係も、少し見えやすくなる気がします。

気候変動と気候正義の違いと私たち

気候正義は、気候そのものを説明する言葉ではありません。「なぜ気温が上がっているのか」という自然科学の問いとも少し違います。問うているのは、「その変化によって、誰が大きな影響を受けるのか」「その負担は公平なのか」ということです。ここに、防災との大きな接点があります。

災害は人を選んでやってくるわけではありません。しかし、その被害は決して平等ではありません。たとえば、災害で被災した後も、十分な蓄えがあり住まいを直せる家庭と、一度の被災によって生活そのものが立ち行かなくなる家庭では、その後の人生への影響も違います。

私たちはつい、自分を基準に物事を考えてしまいます。けれど、自分にとってできることが、ほかの人にも同じようにできるとは限りません。どれほど制度を整えても、すべての人を同じように守ることはできません。制度には条件があり、境界があります。その境界から漏れる人もいれば、自分から助けを求めることが難しい人、そもそも周囲から存在を認識されにくい人もいます。

だから、私たちは、「誰も取り残さない」と簡単に言うことには、少し慎重でありたいと思います。取り残される人をゼロにできると言い切ることよりも、自分たちの目に見えていないところに困っている人がいるかもしれない、と想像することの方が大切なのではないのでしょうか。自分の身の回りから少しずつ視線を外側へ広げていくことが、気候正義を考える出発点になるのだと思います。

気候正義が求めているのは、自分たちがどれだけ困っているかだけではなく、自分たちには見えていない場所で、誰がより大きな負担を負っているのかを考えることです。

自分たちの視界には入っていない人へ、自分の暮らしている地域の外へ、そして今を生きている私たちから未来の世代へ、意識を少しずつ広げていくこと。私たちは、すべての人を救えるわけではありませんし、すべての災害を防ぐことも、気候変動を一人で止めることもできません。それでも、自分たち以外の誰かの困難を「自分には関係がない」としてしまわないことはできます。

防災と気候正義。一見すると別々のテーマに見える二つをつないでいるのは、もしかするととても単純なことなのかもしれません。自分の外側に、意識を向けること。そこから、防災も、気候正義も始まるのだと思います。

チームパシュートです！

私たちは、一般社団法人ソブリン・ムーブメントの活動チーム「チームパシュート」です。チームパシュートという名前は、スピードスケートの団体競技に由来しています。この競技では、選手たちが互いを支え合いながら隊列を組み、それぞれの役割を果たしながらゴールを目指します。私たちも同じように、一人ひとりが得意なことや経験を活かしながら、より良い社会の実現に向けて活動しています。私たちが取り組んでいるのは、「主権者運動」です。政治や社会の課題を誰か任せにするのではなく、自分たちの暮らしと結びつけて考え、学び、語り合い、行動することを大切にしています。発信する人、企画する人、地域で対話を広げる人など、それぞれが自分らしい役割を担いながら活動しています。社会を変えるのは特別な誰かではなく、私たち一人ひとりです。チームパシュートは、仲間とともに学び、支え合いながら、一歩ずつ未来へ進む主権者のチームです。



連絡先 担当：吉田理子 (070-5542-0443)